

大賞 [留学生の部]

日本と中国を愛し、日中関係の改善を願う筆者の真摯な想いに審査委員が共感。日本と中国の双方の子どもたちに呼びかけた表現手法も独創的でした。

NPI 学生小説コンテスト2012
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会
あるべき社会の姿と私たちの挑戦
入賞作品



お互いの コミュニケーションのため ——世界の未来である君たちへ

武蔵野大学 グローバルコミュニケーション学部 1年

林 猷琮 りん ゆうじょん (中国)

はじめに

このテーマを見た時、22歳の私にはまだ彼女がなく、自分の子ども世代のために何をしなければならないかということについて考えたこともなかった。中国には「子どもは世界の花であり、教師は懸命に働いている庭師であり、社会は肥えている土壌であり、国はパワーが無限な太陽である」という言葉がある。子どもは未来の世界を担っているのです。子育てや教育についての議論はグローバル化し、盛んになってきているが、私たちが今住んでいる世界は本当にそうなのだろうか。

社会の変化及び問題点

つま先で立って競争社会を走るのが、目標でないことは確かである。国と国の領土紛争、右肩上がりで、ケンケン跳びばかりが上手な偏差値社会、繰り返す子どものいじめ問題、それらはいったい何をもたらしたか。例証をあげるまでもなく、毎日の新聞やテレビの報道が教えてくれる。もっと落ち着いた社会を創るために、私たちの価値観をどう定めたら良いのか。

時代の流れにより、社会は発展しつつあり、さらに便利で、豊かな生活の方向に向かっている。祖父が生まれた時代は、世界大戦争

で、教育が受けられず、食べ物があることが人生の最高の幸せだと言われた。父が生まれた時代になって、戦争が終わり、世界の諸国はそれぞれ独立し、国民もちゃんと学校に通うことになった。そして、私が生まれた時代では、科学技術の革命により、パソコンや携帯電話などが国民の生活に染み込み、人間は21世紀の時代を歩き始めた。しかし、今20代になった私の世界で、活字離れ、新聞離れが起きている。落ち着いてイスに座って新聞を読む風景はなく、ゲームや映像に追いかける姿の方が鮮明である。しかし、何か足りない気がする。

——中国にいる私

中学生の時代からずっと好きな中国の近代作家に魯迅がいる。中学の歴史授業では日清戦争や日本の侵略についてしか教えてもらわなかった私は、魯迅が書いた「藤野先生」という文章をきっかけに、日本に対して好感を持ち始めた。魯迅は日清戦争の敗戦によって、日本人の中国への蔑視という風潮の中に身を置き、そして中国人の肉体の病を救う医学は当時の中国社会を救うことができないと知り、医学の勉強をあきらめ、精神的病を治し中国の国民性を改造するために文学に身を投じた。日本留学中、日本の一般の人々とのかわりを通して、日本人の素朴さを感じる。魯迅は学校の休み中に、仙台から東京へ行く

途中に泊まった旅館で、彼が中国からの留学生だとわかって、手厚い待遇を受けた¹⁾。また、ある日東京から仙台に戻る列車の中で、老婦人に席をゆずったことをきっかけに、老婦人と雑談し、せんべいとお茶の差し入れをもらった²⁾。学校でも、藤野先生が担当している講義で生涯忘れられない援助を受けた。ノートは初めから終わりまで、朱筆で添削され、文法の誤り一つ一つが訂正してあるだけではなく、多くの抜けた箇所に箇条書きで説明が加えてあった³⁾。実際、今日本に留学しているたくさんの中国人はこのようにことをよく日常生活の中で感じているだろう。

私たちは今はただ戦争の歴史に束縛され、素直に自分の本当の気持ちと向き合うことができないだけである。正しく歴史を認識することは大切だが、いつも歴史の中で生きていくことだけではだめだと思う。歴史の勉強というのは、子ども世代に悲惨な戦争を語り続けることにより、戦争の恨みや報復感情を残すことではなく、戦争を繰り返さないことを学ぶべきである。嫌なことだけを見て、日本人を嫌ってもいけないし、日本の素晴らしさばかり見て、日本は優れているというふうに思うだけでもいけないと思う。日本に留学している私たちは、現代の日本と中国のため、また両国の未来の子ども世代のために、客観的かつ冷静に日本を見分ける必要があると思う。ただ、本やメディアなどを鵜呑みにするだけではなく、きちんと自分の体験を通して、事

実を判断することが大切だと思う。そうすればお互いに通じ合うものが生まれるだろう。

——日本にいる私

3.11の東日本大震災の当日、すべての電車が止まってしまい、帰れないため、一晩池袋駅で過ごすことになった。駅内で避難している時に、偶然、台湾が大好きな日本人の大学生と出会い、いろいろ話しているうちに彼女と友達になった。彼女は今一生懸命、中国語を勉強している、将来は台湾人と結婚したい、そして台湾に住みたいとよく話していた。ある時、「中国の内陸の人はダメですか?」と聞いたら、「だって中国は危ないじゃん、行けない、殺されそう」と即答された。「なぜですか?」と聞いたら、「戦争が原因で、中国人は日本人のことを嫌っていそうだし、普段YouTubeで見る中国は治安が悪そうだし、空気も悪そうだし…。私は心が張り裂けて、無言のままだった。そのようなことを言われるのは予想したが、いつも本音を隠そうとしている日本人にそこまで強く言われるとは思わなかった。中国人としてずっと誇りを持っている自分はこの瞬間、失望のどん底に沈んでしまった。同世代の日本人の目には中国がこのように映っているのかと初めて知った。

創り伝えたい社会

日本と中国のすべての人々には伝えられないかもしれないが、今の私にできることは、このような人々に私たち留学生の声を伝えることだと感じた。現代社会の人々のため、そして次世代の子どもたちのためにも。

——中国の未来の子どもたちに

祖国の将来の希望である君たち、一つの物事を見る時に、一般論は危険であり、自ら考え、客観的に理解することが大事だと思う。中国に対する日本の侵略については大変憎んでいると思うが、昔は昔、今は今である。魯迅は「私は人をだましたい」⁴⁾という日本語の文章の中で「悲しいことに我々は相互に忘れることが出来ない」、さらに小林多喜二の死を悼む文章で「日本と中国との大衆はもとより兄弟である」⁵⁾と、魯迅自身の日本に対する複雑な心境を述べている。そして、「排日の声の最中であって、私はあえて断固として中国の青年に忠告を一つさしあげたい。それは、日本人は私たちがみならうだけの価値があるものをいっぱい持っているということだ」⁶⁾。あの戦争の時代に魯迅がそのように言ったことを理解しなくてはならないだろう。現代に生きている私たちはもっと冷静に考える必要があるのではないだろうか。今の日本の生活に、中国の古くからの風習が多

く影響している。特に衣食住を含めた日本の生活、文化の簡素さ、こまやかさ、さらに日本人の礼儀正しく真面目なこと、私たちにあって、勉強できるところはたくさんあると思う。

君たち、少しでも聞いてみてください、日本に留学している私たちの声を。私は日本に留学している4年間に、いろいろな日本人と出会って、嫌な思いももちろんしたが、好きなところがたくさんある。日本に来たばかりの当時の私は、日本語があまり話せなかったが、日本のレストランに行き、メニューを指でさすだけでも店員さんは敬意を持って笑顔で接してくれた。しかし、これが中国だと真逆で店員さんの態度はすごく悪いと感じる。今までずっと中国にいる君たちだが、このような日本を一度見に来るべきだ、そうしたら、その違いをきっとわかってくれると思う。そして、時間通りに運行される電車、ゴミが落ちていない道路、日本社会はあらゆるものの規律がきちんとしている。しかし、今の中国だと、バラバラの時間帯に来る電車やバス、人々は列に並ばないし、行列に入り込むこともめずらしくない。道がゴミだらけで、人口が多いので、このようなことになってしまうことはしかたがないと私も理解できるが、それを私たちの逃げ場にして、このままの中国で本当に良いのだろうか。

中国の昔話「三文魚的故事」(鮭の物語)で「人間は鮭のように時として命をかけて、自ら逆流に向かって這い上がっていく精神が必

要である」というように、もう一度魯迅の時代に戻ってみると、当時の文明の遅れや民族の将来などについて懸念していた魯迅は、日中戦争の危険な状況の中においても「日本の全部を排斥しても、真面目という薬だけは買わねばならぬ」⁷⁾と言っていた。21世紀に中国で生まれた君たちはどう思うのだろうか？

——日本の未来の子どもたちに

日本の未来の象徴である君たち、外国の文化を理解するのに、単にうわべだけを眺めることは良くないと思う。その国の人々の感情面での生活に着目し、文化と生活習慣に対する態度のいくつかを理解することができて、初めてその国について少しでもわかったと言えるのではないだろうか。中国人は確かに昔の日本人を恨んでいるが、日本が大好きな中国人もかなりいると思う。私もその中の一人である。

君たちに聞いてほしいことがある。私には今中国に留学している日本人の友達がいる、その彼らの目から見えている中国の印象はこうだ。「中国に来てから、なかなか生活習慣になれず、どこに行っても人が山ほど多く、所かまわず痰を吐く人がいる。公共トイレは汚いし、トイレトーパーも置いてないし、店員さんの態度が非常に悪い。しかし、中国のことは嫌いではない。中国人は頑張り屋さんで、中国国内は思ったより安全だ

し、大学の学生は非常に努力家で、積極的に声をかけてくれるし、親切な人も少なくない。中国に対する悪い印象はすべてなくなるとは言えないけれど、少なくなっている。中国についても興味を持ち始めた。そして、家電などの製造技術が新興国に急速にキャッチアップされていると同様に、『真面目、勤勉と言えば日本人』という絶対的な評価も、薄れてしまうかもしれない。その友人が中国に行った時に、中国の出入国審査のカウンターに興味深い機械が設置されていたそう。これは、出入国者が直接その場で審査官を評価できる機械で、「Greatly satisfied (大満足)」、「Satisfied (満足)」、「Checking time too long (時間の掛かりすぎ)」、「Poor customer service (ひどい)」の4つのボタンがあり、個々の審査官のID番号毎に評価が集計される仕組みになっている(銀行の窓口などにも類似の機械が置かれている)という話を聞いた。「低い評価になった場合、罰則があるようだ。この機械の設置前後での審査官の態度の変貌ぶりにはかなり驚かされた。パスポートの扱いが丁寧になり、人によっては笑顔も見せるようになった」らしい。中国も頑張っているんだなと思った。だから、他国を評価する際に「**人は不真面目」などと短絡的に国民性を決め付けてしまうことは良くないと感じた。21世紀に日本で生まれた君たちはどう思うのだろうか？

おわりに

国と国とのかかわりがますます増えている今日の国際情勢の中で、いろいろな摩擦や衝突が起き、自分の固有の観念により、相手を認識するだけではなく、異文化の環境において自分の目で直接確かめ、心で感じる事が大切だ。相手の立場に立たないと、相手はどう思っているかということは永遠にわからないと思う。国によって、文化はそれぞれであり、いいか悪いかではなく、君たちはそれについて、その文化を勉強する価値があると思えば、それだけでも十分だと思う。日本では「お互い様」という言葉があるように、お互いの立場に立つことにより、それが自分をもう一度見つめ直すことにもなる。これからの社会にとって、それはいっそう必要になるだろう。

文中注

- 1) 许寿裳「我所认识的鲁迅:《民元前的鲁迅先生》序」『鲁迅回忆录(专著)』(上册)北京出版社、pp.476、1991年
- 2) 许寿裳「亡友鲁迅印象记:二十四日常生活」『鲁迅回忆录(专著)』(上册)北京出版社、pp.291、1991年
- 3) 鲁迅「藤野先生」『朝花夕拾』人民文学出版社、1926年
- 4) 鲁迅纪念馆编『鲁迅日文作品集』上海文艺出版社、pp.45、1981年
- 5) 鲁迅纪念馆编『鲁迅日文作品集』上海文艺出版社、pp.7、1981年
- 6) 鲁迅(編・相浦杲ほか)『鲁迅全集』全20巻 学習研

お互いのコミュニケーションのため
——世界の未来である君たちへ

- 究社、第十巻、pp.421、1986年
- 7) 内山完造『魯迅の思い出』社会思想社、pp.47、
pp.89、1979年

参考文献

- ・ 孫長虹 「魯迅の日本観」2003年